



北海道情報大学

同窓会会報

第3号

発行
北海道情報大学
同窓会

卒業後も頻繁に

訪れたくなる大学

北海道情報大学

学長 井野 智



卒業生の皆さん、三十代も半ばの一期生を筆頭に、社会の中堅として元気で活躍のことと存じます。

昨年は同窓会設立十周年にあたり立派な時計台を寄贈いただき、本年はまた「卒業生による一年生向け講話」に四人の講師を派遣いただくなど、母校に寄せる皆様のご支援ご高配まことにありがたく、教職員ならびに学生を代表して厚くお礼申し上げます。

ご存知のように、今、わが国は少子化による大学全入時代を迎え、多くの大学、とくに歴史の浅い私

立大学の多くが定員割れという厳しい現実には直面しており、本学も例外ではありません。

昨年、本学では初めての「学生による授業評価」アンケート調査を行いました。授業に対する学生の満足度はそれほど高いものではありませんでした。特に一年生の評価が低かったことは由々しき問題、学生の不評が出身高校へと伝わり、進路指導にネガティブな影響を与えるため、初年度教育の充実を図ることは急務の課題です。

全国規模で学生の満足度調査を最初に実施したリクルートという会社は、大学満足度に与える影響要因を「教育内容」「学生生活」「(学内の)人間関係」に分類し、「人間関係」がもっとも支配的であることを報告しています。このことから私は「人間的に温かみのある大学づくり」をモットーに、すべての学生が社会で活躍できる力をつけ、「この大学で学んで良かった」と誇りをもって卒業し、卒業後も頻繁に訪れたくなる大学にしよう、学生・教職員全員に呼びかけています。

大学の本当の評価は、学生の満足度ではなく、卒業生が社会で活躍し、社会的に如何に評価されているのかにかかっています。

卒業生の活躍ぶりを知る上で、同窓会の集まりや会報発行は貴重な機会であり、同窓会の一層の発展を願っています。

今後とも後輩たちのため、なによりもご自身のため、卒業生各位の一層の研鑽と発展を期待しています。

卒業生寄稿

『連帯感』(動から静へ)

北海道情報大学 第一期生

副会長 高橋 臣仁



一、はじめに
私が入学した当時の本学は、伝統、慣例といったものがなく、その環境での学生生活は全てが試みのようなものでした。ただ、公私共に動き盛んな時期で

もあったように思い起こされます。そんな大学生活では失敗も数多く御座いましたが、「一つの事を成し遂げる」といった難しさやその達成感を体で味わい、いい意味で苦勞を仲間と共に致しました。そして、いつの間にか「連帯感」としての絆が築かれ、今に至っていることを感慨しております。

現在、私は白鳥大橋やレインボーブリッジなどの橋梁設計やIT分野を手がける会社で技術営業職として日々、邁進しております。

二、変化

己の自信が呆気なくも脆かったのが二十代の記憶でしょうか。睡眠時間を惜しみながら過ごした学生時代(残念ながら卒業以外)は、常に新しい領域への踏み込みであり、感動と望みが膨れた時代でした。新入社員時代の頃はバブル期とも言われており、当時、私は為替を扱う企業で働いていました。バブル期の象徴として、社員旅行では二機のチャーター便で豪州へ行ったこともあったぐらいです。

私事、バブル期を「動」というならば、今は「静」へ転じている感じですが。七年前に結婚し、その後、家族が増え、自宅を構えるようになりました。「動から静」を換言すれば、「新しい領域への探求心から守るべき責任が生じてきた」と言ったところででしょうか。それは両親が私に成してくれた事